

教育実習の 報告

教育実習までの過ごし方

山川 謙輔

(史学・文化財学科4年)

はじめに

私は今年の5月の終わりから母校の高校で3週間の教育実習を行った。

担当クラスは2年1組で担当科目は主に日本史Bだった。部活指導では硬式野球部を担当し、さらに生徒会活動の指導も行った。



去年の今頃の私

私は、はやい段階で母校から教育実習の承諾をいただいた。そこから気合が入ったのは言うまでもない。しかし実習は決定していても具体的に何を準備したらいいのかまったくわからない状態でちょうど去年の今頃を過ごしていた。そのような中4年生の先輩方のアドバイスもあり、授業の練習をしていくことに決めた。

4年生の先輩の指導の下、学習指導案の作成を行い、3年生の11月には模擬授業を行った。それまで教科教育法や史学・文化財学科の自主的な教職勉強会で何度か模擬授業を行っていたので幾分かの自信を持っていた。しかし、この11月の模擬授業を観察して下さった先輩方から授業後に「わかりにくい点があった」との指摘を受けた。また、指導案に関しても「これでは甘すぎる。もっと練りなさい」と指摘され、かなり落ち込んだ。そこで私は指導して下さった先輩とどこがいけなかったのか、あるいは、どう改善したらよかったのかについて話し合いをした。その話し合いにおいて気付いた点が2つ

ある。

1つは必ずしもその授業対象者が教科内容の専門性を持っているとは限らないということである。たとえば私が模擬授業を行ったのは日本史Bである。それまで授業の練習を行う場合の相手は同じ学科に所属している先輩や同級生であった。つまり、ある程度専門性の高い授業を行っても、もともと知識のある人が授業対象者だったので理解してもらえるのだが、特に日本史を選択して学習していない対象者については理解しにくい内容だったのである。

ではどのようにしてそのような対象者に理解させるか。そのためには具体例の提示が一番良い方法だと私は考えた。さらには私たちの身近な暮らしに関連させて理解させるのも良い方法である。誰が受けてもきちんと理解できる言葉選び、授業展開が必要だと気付かされた。

2つ目は生徒と対話することである。教師が一方的に話すだけでは生徒は思考しにくくなる。そのためには生徒に考えさせる時間を設ける必要がある。そこで重要になってくるのが発問である。発問で気を付けなければならないのが生徒にしっかりと思考させる工夫を施すことである。

これらのことに重点を置き、私はそれ以降、教育実習までの間、教科教育法などで授業の練習を繰り返し行った。

教育実習の直前

教育実習の準備をより一層本格化させたのは、5月に入ってからだだった。その時点で、もうすでに教育実習の初日から2年生の授業を担当することがあらかじめわかっていた。このため、担当する授業の単元の範囲を絞り、その範囲内で重点的に教材研究をおこなった。学習指導案を作成したり、授業プリントを作成したりして、実習の準備を進めていった。実際には実習前日に授業の進捗状況を伺い、そのうえで調整をおこない、今から振り返ってみると、落ち着いて、授業準備ができていたと思う。

教壇に立つものとして教科の専門性は、いの一番に問われるところである。もちろん私も専門知識は身に付けているつもりである。しかし、専攻してい

る日本史でも得手不得手がある。先述した通り実際の授業ではほぼまっさらな状態の生徒に教えるために、そのときに教師の知識が不十分であると説明がとても曖昧になる。よって生徒も十分に理解できないということになりうる。そのため私はどの時代であっても完璧に教えるためにいろいろな出版社の教科書、さらにはセンター試験の問題などを繰り返し解いたりすることで、知識をつける努力を続けてきた。その結果、教育実習中には、授業の質が良くなったと実感することができた。

おわりに

私が実際に実習を終え、最初に感じたことは、やはり教員になりたいという思いであった。

「わかりやすい」という生徒の言葉、理解してくれたという手応え、自分がやればやるほど生徒がついてきてくれる嬉しさ。私はさらにいい授業がしたいと思い、生徒ともコミュニケーションを図り、どんな授業だったら楽しいと感じるかなどと積極的に尋ねることもあった。このようなことができるのも実習生ならではの強みである。1日1日が充実していてとても貴重な時間を過ごすことができた。

これから教育実習を迎える皆さんには、ぜひ授業の練習を行うことをすすめる。それを同じ学科の学生だけではなく、他学科の学生にも見てもらうことで改善点が見えてくる。

これから教育実習までの期間を有意義に過ごしてほしい。今からでもやれることはたくさんある。そして教育実習に行く意味、なぜ教員免許を取得するのかを考えて教育実習に臨んでもらいたい。

生徒との関わり方の難しさ

赤星 智里

(国際言語・文化学科4年)

はじめに

私は、5月の初めから3週間、母校の中学校で教育実習を行った。指導教諭は1年1組の担任で国語の先生であった。授業や学級経営もその先生のもとで観察した。



私は、気が弱く初対面の人と話すとき緊張してしまう。そのため、教育実習中は生徒指導で大変苦労した。しかし、その中で学んだこともあった。私は、この教育実習で学んだ生徒との関わり方について述べていきたいと思う。

男子生徒との関わり方

まず、男子生徒との関わり方である。実習初日、担当クラスでの自己紹介をした。直後の休み時間に女子生徒とは、話をして距離が縮まった。給食の時間になり、私は生徒と距離を縮めるチャンスだと思い同じテーブルに座っている生徒に話しかけた。女子生徒は、反応を示してくれたが男子生徒からの反応はなかった。

午後からは体育大会の練習で男女別に別れての練習だったため男子生徒と関わるのが出来なかった。

二日目からは、もっと積極的に関わりに行こうと思ひ休み時間や昼休みなど教室の方へ行っていた。

ある日の体育大会の練習でその時間は、入退場の練習だった。運動場の後ろの方にみんなで並んでいるとき、ある一人の男子生徒が前の生徒にちょっかいをかけ始めた。私は、その生徒の近くに行き注意をした。直後はちょっかいをかけるのを止めたが、またかけ始めた。私はまたかと注意を繰り返した。言ったときは聞くのだがまたかけ始めるのでさらに注意をした。

私は、教育実習生だから聞いてくれないのだろう

と思い諦めていた。しかし、その次の日もやはり繰り返されたので、ある先生に相談してみると、「注意するときは、なんでダメなのかを言うと聞いてくれますよ」と言われた。また、「注意するのって、はじめは難しいと思います、特に男子は。今、先生とその子にはまだ距離があるだろうし、男子と仲良くなるには、ほめてあげるといいですよ」とも言われた。私は、注意をしているときなぜだめなのかをその生徒に伝えていなかったと反省した。理由がわからないまま怒られても生徒は繰り返してしまうと思った。

次の日から注意するときは、なぜだめなのかを伝えるようにした。そして生徒との距離を縮めるために、授業観察の時には、同時に机間指導を行う機会があり、その生徒がワークノートを進めていたので、「おおっ次のところまで進めてる。偉い。」とほめたり、給食の時間には、その生徒が有名なユースのクラブチームに所属していることを生徒から聞き、「すごいね」と言うのが嬉しそうにしていた。するとその生徒は、注意をするとちゃんと聞いてくれて休み時間などでも話せるようになった。

女子生徒との関わり方

次に、女子生徒との関わり方である。女子生徒とは、先にも述べた通り実習初日から距離を縮めることができていた。しかし、それは1年生だけで2、3年生とはほとんど交流がなく、実際に関わるのはダンスの練習が初めてだった。

私は、まだ振り付けもわからないので一人の生徒につきっきりで教えてもらっていた。そのときは、2年生と3年生の間にわずかだが不穏な雰囲気が漂っていたことに気づかなかった。

練習の時私はある程度ダンスの振り付けを覚えたので一緒に練習をしていた。しかし、一回全員で合わせているときに2年生の一部の生徒がワントンポ遅れていた。それに気づいた3年生のダンスリーダーが「そこずれてる」と指摘し、曲を止めて「まだ踊れてない子いるから個人練習。特に2年生。」と言った。それから個人練習にうつり練習をしていると、近くで「はあ、まじ、うざい。」と言う声が

聞こえた。私は誰だろうと思い周りを見渡すとさっき注意されていた2年生だった。私は、そのとき他の生徒と練習をしていたのでそのままにしていた。

その日は最後にもう一回通して終わった。ダンスリーダーが終り際に「全然踊れてないから。ちゃんと真面目に練習して」とみんなに言っていた。それから毎日授業と放課後にダンスの練習があった。どんどん練習していく中でダンス自体は、まとまっていったのだが2年生たちの不満はますます膨らんでいき、本番まであと3日の練習の時に一人の生徒が「まじ3年だからって上から目線すぎ、こっちだって練習頑張ってるし」と言った。それが聞こえたダンスリーダーは「そんなに踊りたくないならいいよ、抜けて。いても迷惑」とその子に言っていた。

近くにいた先生と少し離れたところで話を聞いた。私は、先生の指示に従い2年生の言い分を聞いた。その子は、忙しいながらも時間を見つけて友達と一緒に練習をしているのに踊れていないと言われて不満が溜まっていたと言った。いっぽうで、ダンスリーダーは去年のダンスリーダーの先輩たちのように指導しなければと思い、一生懸命考えて教えていたのに上から目線と言われて怒ってしまったと言った。

お互いに今まで思っていたことを言い合い、納得したことにより練習を再開した。

その日の放課後、一緒に対応してくれた先生から「お互いに一生懸命やっているからこそああやってぶつかってしまうんですね。どこかで私たちがガス抜きをしてあげていればこんなことにはならなかったのだと思います。」と言われた。私は、あの時にちゃんと話を聞いてあげればよかったと後悔をした。

おわりに

この2つの事例はほんの一部のことである。私は、男子生徒と女子生徒との関わり方を分けていたが、そうせずにしている先生もいた。それぞれに合った関わり方があると思うので見つけてみてほしい。

3年生の皆さんは、教育実習に向けて不安がある

と思います。実際に生徒と向き合えないとわからないこともあるが、日常生活で友達との会話の中などで相手にうまく伝えることを意識してみたり、教育現場で起こった事例について自分だったらどう対応するだろうと考えてみることも教育実習の中で役立つ部分があると思うので実践してみてください。

一人一人の生徒と向き合う

圖師 杏子

(国際言語・文化学科4年)

はじめに

私は、6月5日から6月23日までの3週間、別府市内の学校で教育実習を行うことができた。担当クラスは中学3年1組であり、指導教諭は担任の国語の先生だった。



朝のHR・授業観察・清掃・終礼を実施し、その後は、部活動にも参加した。授業は、中学1年2クラスの国語科書写を計2コマ、高校7クラスの芸術科書道を計12コマで担当は中学校であったが、高校での活動を多くさせていただいた。

授業観察では、先生が行う授業の内容を指導案として文字に書き起こすことが私の仕事であり、それを私は逆指導案の作成と呼んでいた。こんな時はどう指導すれば良いのか、あんな時はこう支援すれば良いのか、といったことが次第に理解できるようになった。

普段、大学の教科教育法で学んでいる指導案作成において、①生徒観・指導観・教材観の順番を固定せず、場合によって順番を変化させても良いということ。②「～させる」という文言を排除し、「促す」「導く」「一緒に活動する」といった文言を使用すること。さらに、③誰が見ても授業が実施できる指導案を作ることを心がけていた。

教科担当の先生から「この3つのことは大事なこ

とだね!」と言葉を頂き、中学の先生も賛同してくださり、嬉しかった。

万全の状態でも臨んだが、教科外活動である清掃時間に想定外のことが起きてしまった。

初めての清掃時間

昼休み終了のチャイムが鳴り、15分間の清掃時間がやってきた。私は、担当クラスの清掃指導を行うことになり、張り切ってクラスに行った。「どうしよう。」驚いたことに、①きちんと清掃に取り組んでいた生徒。②昼休みに食べきれなかったという理由でデザートを食べ、食べ終わったら紙を丸めてボールにし野球を始めだしたA君。③A君と一緒に遊んでいる生徒。④野球を始めだしたA君と一緒に野球をして遊んでいる生徒の行動に対する傍観者。様々な姿を見せる生徒が教室に混在していた。

15分で床を拭き、机を移動して、黒板の掃除、ごみ捨て等、しなければならないことが山積みにある。このままでは時間内に終われない。どのような声掛けをすれば良いのかと悩んだ。

「今は掃除の時間だよ!みんなやるよ!」「早く取り掛からないと次の授業に間に合わないよ!」と、私の声はかなり大きくなっていった。しかし、生徒の声にかき消されて伝わらない。さらに大きな声で訴えても反応はない。言葉で伝わらなければ行動で示せばいいと思い、率先して机を運んだ。すると、次第に一人一人の生徒が手伝ってくれるようになった。しかし、一時的なものだった。

そのような状況が続く中、担任の先生が教室に来て、学年主任の先生が見回りに来て、やっと全員が清掃に取り組むようになった。担任の先生、学年主任の先生と私自身はどこが違うのだろうと深く考えていた。

A君の場合(清掃時間)

初日に問題だったA君に「先生は掃除してくれるけん、好きやわ」と言われた。そこで生徒の見本になるようにと起こした行動だったが、私は生徒にとって都合のいい人になっていたと思い込んでいた。A君自ら動くことはないが、私が声掛けをしている姿を見て、A君は「○○君、今日は雑巾の担当

やけん、早く雑巾して！」と的確な指示を出していた。言われた友達は、少し文句を言いつつも清掃に取り組んだ。A君は実は、言い方は悪いが、クラスの中で中心的存在だったことが後で分かった。

先生に相談したところ、「いつもこうなんです。地道に声を掛け続けることが大切ですね」と先生からアドバイスを受けた。先生は生徒にどのような声掛けをしているのか。その声掛けに生徒はどのような反応をしているのか。この2点の観察に注目した。

それからはA君に限らず、生徒一人一人が任せられた役割は責任を持って出来るように、何をどのようにすればいいのか、細かく指示を出すことで清掃時間の充実を図ることができた。

一週間ほど経ち、A君は指示を出すだけでなく、自分もやらなければならないという自覚の芽生と共に、清掃に取り組む段階が早くなり、私が「よし！今日も頑張ろう！」と一言声をかけると生徒は自ら進んで取り組むようになった。A君は根っからの問題児ではなく、リーダー性や行動力があると知れた時、生徒の成長を感じることができ、とても嬉しかった。

「やればできるね！」とA君に言うと得意げそうな笑顔をみせてくれた。

おわりに

教育の役割は、「いかに自立した人間をつくるかどうかにある」という最終目標のもと教育実習に臨み終了した。教育実習が終わり、約4か月経つが、思い出すことは失敗や上手くいかなかったことばかりである。

3年生の皆さんは今、生徒指導論の授業を受講されていると思うが、「生徒指導とは？」と聞かれてどのように答えますか。色々な答え方があり、答えは一つではない。例えば、文部科学省が平成22年3月にまとめた「生徒指導提要」によると「一人一人の児童生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めるように指導、援助するものであり、学校がその教育目標を達成するための重要な機能の一つである。」と定義されている。言い換えると「生き方の指導」とも言える。

授業における創意工夫がもっとなされていれば、生徒への対応がもっと適切なものであれば、教育現場のトラブルを防ぐことができる。3週間で信頼関係を築くことはできなかったが、生徒指導とは、授業においても教師と生徒の心が通じ合い、お互いに信頼関係を築いていくことであり、そして、一人一人の生徒と向き合い、決して諦めず地道に声を掛け続けることが重要であることを学んだ。

教員マイナス1年目という意識を持ち、日々の勉強、教材研究や資料作りに励み、実のある教育実習になれるよう努力してほしい。

授業づくりにつながる・つなげる生徒理解

水谷 美晴

(国際言語・文化学科4年)

はじめに

私は5月22日から6月9日までの3週間、母校の中学校で教育実習を行った。母校といっても6校が統合され今年4月に開校したばかりの学校である。各学年6クラスあり、うち2クラスは特別支援を要する生徒のための少人数クラスである。最初の1週間は授業観察や、校長等による学校の指導方針や現状に関する講義を受けた。残りの2週間は担当学級である1年1組を中心に、1学年4クラスの授業を主に実践した。



生徒の実態

最初の1週間の授業観察では入学したばかりの1年生だけでなく2、3年生も緊張した面持ちで授業に取り組んでいた。6校が統合され、発表の仕方や進度の違いに教師も生徒も戸惑いながら対応しているようだった。

特に2、3年生の授業の様子からは緊張感だけで

なく遠慮や恥ずかしさが窺えた。一方で1年生は積極的に発表したり、時にはふざけたりするほどにぎやかな雰囲気が多く見られた。また4クラスそれぞれの国語への関心や成績を踏まえて、授業することを思い浮かべながら観察することができた。

教育実習に臨むまでの間に模擬授業等を行うため何度か学習指導案を作成してきた。しかし実際の生徒は予想を超える発言や行動が見られ、多くの指示を必要とするということを学んだ。そのため授業づくりにおいて生徒の実態をどれだけ把握し、どれだけ考え、意識できるかが指導観に大きく影響すると強く実感するようになった。

教師と生徒のコミュニケーション

学校でのコミュニケーションというと、休み時間や部活のイメージを強くもっているのではないだろうか。しかし私は実習を経ていく中で授業におけるコミュニケーションが最も重要だと感じた。

教壇に立ち授業を行うと教師一人がクラス全員に対して行うため1対33のように感じる。しかし生徒に授業の感想を聞いたとき自分と教師1対1の小さなやり取りが励みになったり、わかるきっかけになったりしたことを話してくれた。それは決して机間指導や発表のことだけを指すのではなく、授業を進行していくときのコミュニケーションの重要性を表していると感じた。

授業実践を通して特に大切だと学んだ2つの点を以下に挙げる。

① 問いと答え

「何が問われているのか、どう答えるべきか」

この言葉は指導教諭の方からアドバイスとして繰り返していただいた言葉である。国語の文学的文章の読解の授業で何を教えるかが明確であるのはもちろんのことだ。そのうえでどのような問いを投げかけ、答えの方向性を導けるかが生徒の理解を左右すると学んだ。

しかし授業を行うなかで国語を苦手とする生徒が多く、問いかけに対して厳しい表情をすることが多かった。例えば、始めに音読の段階で文章の流れを理解していたとしても、次に人物の表情や会話文

から読み解くと文章の流れがわからなくなるようだ。そこでコミュニケーションをとりながら生徒がイメージしやすい部活や家庭における例文を多様に用いると、楽に考え、またその後も印象に残るようだった。更に気軽に対話しながら確認して問うと、様々な意見を出すようになり授業の雰囲気も明るくなった。このように問いを容易く理解し答えるためには、コミュニケーションを通して生徒一人ひとりに即した表現を用いて問うことが重要だと思った。

② 指示の言葉の工夫

また、各クラスの様々な様子があったが1年生に共通して特に注意したことは<指示の言葉の工夫、またその多さ>である。これは授業観察時に教師の指示の言葉に対する生徒の動きを見て気づいた。更に特別な支援を要する生徒も参加する道徳の時間では、より一層意識して取り組んだ。

1年生は素直に指示に従う反面、自分で予測したり考えたりして次の行動ができない生徒が多い。最初に何を書くか提示したワークシートを配布し説明しても、板書から体を振り返るとぼーっと見ている生徒がいる場面が何度もあった。例えば「教科書の本文をみんなで読んでいきます」というだけでは生徒は教科書を開かないのである。しかし「ワークを閉じて、教科書の○ページを開いてください」というとスムーズに授業を進行することができる。また「一旦前を見てください」というだけでは手遊びしたり、ノートを写しながら目を合わせたりする生徒も多い。しかし「書き終わった人はペンを置いて、姿勢を正して、私と目を合わせてください」というと、その通りに行動して、授業の展開として良い切り替えの合図にもなった。

このことから<指示の言葉の工夫と、またその多さ>に意識しながら授業に取り組んだ。まず指導教諭の先生が行っていた授業の始めに授業の流れを書き、説明して始めることを実践してみた。すると視覚的にも自ら確認しながら見通しをもって行動する生徒が増えたように感じた。他にも、細やかに多くの指示を出し、机間指導でも生徒の能力に合わせて、かける言葉やその数を変えることで授業をテンポよく行うことができた。またそのように行うこと

で様々な生徒、クラスが授業に参加しやすい雰囲気を作ることができたのではないだろうか。

おわりに

授業でのコミュニケーションの重要性についてみてきたが、学校生活における指導でも共通して大切なのは生徒理解だと学ぶようになった。生徒がどんな行動をするのか。生徒がどんなことで悩んでいるのか。よく理解しわかってこそ、それらに応じた指導ができると学ぶことができた。これらを踏まえて、より生徒の実態を捉えた指導観へと高めていきたい。

授業観察で学ぶこと・学べる こと

佐藤 優希
(発酵食品学科4年)

はじめに

私は6月6日～26日までの3週間、母校の中学校で教育実習を行った。教科は理科で2年生を担当した。授業は10回行った。ここでは授業実践に至るまでの準備や計画について述べる。



授業観察の大切さ

これは、学習指導案を作る際にいちばん重要であると感じたことである。

私は2年生の理科の授業を観察することで、授業のまとめへの持っていき方や発問の内容がクラス毎に少しずつ違っていることに気づいた。

例えば、午前中に授業があり、生徒は集中して授業を受けていた。しかし、授業が給食後にあるクラスは集中力がとても低下しており、生徒同士で授業に関係ない話をしたり、寝たりしていた。そこで、

その授業を行っていた先生は、午前中にあった授業の時よりも多く、生徒に一つ一つ指示を出していた。それは、生徒が何をしたら良いか分からない、という状況を減らすことで授業に対する集中力を継続することができるからである。

このように、授業観察はクラスごとの特徴や生徒の集中力がどれくらい続くかということ、あるいは午前と午後とで、授業態度がどう違うかなど、様々な視点から観察する事が大切である。また、ICT機器を使って視覚からも興味を持たせる事で生徒の集中力を持続させることができるため、先生方がそれをどのような時にどのような使い方をしているかを十分に見ることも重要である。

等質な授業

教科担当をして下さった先生は2年生の学年主任でありながら5クラス全ての授業を行っていた。それ以外にも部活の顧問や学年行事である職場体験実習や修学旅行なども担っており、とても忙しい先生であった。

しかし、そんな忙しい中でも、5クラス全ての授業を完璧に等質な授業を行っていた。なぜそのようなことが出来たかという点、事前の準備を毎回行っていたからである。模造紙に板書計画にある言葉を書いておき、裏に磁石をつける、という作業を行っていた。そうすることで多くの利点がある。これから3点述べる。

1つ目は、模造紙に書いたあと、黒板に貼ってみることで、授業を行う時のイメージや板書が完成した時の大体を見ることが出来る。

2つ目は、一度準備をしたら5クラスすべてに使うことが出来るので、自分の時間を増やすことが出来る。また、伝え忘れ、書き忘れが無くなり、生徒のノートも全クラス全く同じになり、のちに評価もしやすくなる。

3つ目は、チョークで書きながら黒板に向かっていく時間より模造紙を貼るだけなので板書をする時間を短縮することができ、生徒がちゃんと板書をしているのか、など机間指導を行うことが出来る。

事前に準備を行うだけで生徒と向き合う時間も増

え、全クラスに必要な知識・情報を伝えもれなく等質な授業を行うことができる素晴らしい方法であった。

「授業は生きもの」

この言葉は教科担当の先生から言われた言葉である。

指導案や板書計画をたてていても、実際に授業を行うと、教師側の発問に対して、生徒からはこちらの想定外の答えが返ってきて本来の計画から外れてしまうことが多々ある。しかし、そのおかげで生徒の知識を深めることができ、自分自身では気づかなかった生徒の考え方、発想を知ることができる。だからこそ授業中に多くの質問や発問をすることやその内容が重要であるといえる。

実際に、あるクラスでの授業中に、炭酸ナトリウムに塩化カルシウムを加えたら炭酸カルシウムと塩化ナトリウムができ、炭酸カルシウムが白色沈殿するという反応を見ていた。その際に「塩化ナトリウムは塩だからしょっぱいの？」と尋ねられた。予想外の質問に戸惑っていたが、舐めてみても少量なら身体に悪影響はないと教科担当の先生の判断もあり、実際に生徒の前で舐めてみた。また興味のある生徒にも舐めてもらい、本当に反応後に塩ができていることをクラスみんなで実証することが出来た。

このことから、少し指導案の計画から外れてしまったが、自分自身にない発想を生徒から貰うことにより、「授業は生きもの」であることを実感した。

学校全体の指導方針を知る

実習が始まってすぐに校長先生から今学校がどのようにして生徒に対して生徒指導や学習指導を行っているか等の学校全体の指導方針を知ることができたのも重要である。

実習先では、生徒にアンケートを行っていた。その結果から「人から認められたい」、「愛情を多く受けたい」と思っている生徒が他校に比べて多いと分かっていた。その上で学校としての取り組みでは、叱る時は全力で叱って、褒める時は全力で褒めて認めるということを一丸となって取り組んでいた。ま

た、授業時の質問や発問に対して積極的に答えてくれる生徒が多いことも分かっていた。

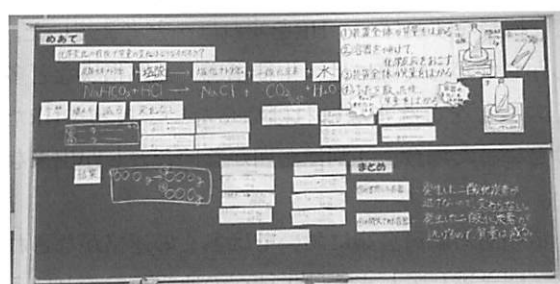
私は学習指導案をつくる際に、授業観察で学んだことや学校の指導方針を十分に踏まえ、板書計画を念入りに行ったり、あるいは叱る事と褒める事をしっかり行ったり、さらには質問や発問の回数が多くしたりすることを心がけた。

おわりに

実習前にして良かったと私が思うことは、模擬授業を繰り返し行ったことである。教育実習を終えて振り返ってみれば、当時の模擬授業の内容は知識を詰め込む授業であったと思う。しかし、50分間がどのような時間の流れ方をするのかということの感覚を掴んだことは、学習指導案をつくる時に非常に役に立った。

反対にしておけばよかったことは、生徒とのコミュニケーションをとる方法を考えておくことである。一見指導案を作る際に関係のなさそうに感じるがそうではない。早くからコミュニケーションをとることで生徒のことを知ることができ、発問を入れるタイミングや授業のイメージが付きやすくなり、指導案を作りやすくなる。

教育実習に行くまでには模擬授業以外にもできることはたくさんあり、今の日々の積み重ねが来年の教育実習に臨んだ際に必ず生きてくる。今から取り組めることに是非取り組んでもらいたい。



教員の「矜持」

隈部 翔

(史学・文化財学科4年)

はじめに

私は母校である高等学校で3週間実習を行った。母校には、私の恩師である先生方が多く残られていた。そこで私は母校の恩師の先生方に厳しい指導を頂きながら自己研鑽を重ねるために、母校である高等学校での実習を強く望み、大学側と実習校に了承を得て、高等学校での教育実習を3週間行うことになった。



教員としての責任感

多くの実習生は6年ぶりや3年ぶりに、教員の立場で中学校や高等学校に戻る。生徒ではなく教員として戻るのである。そこには、責任感が伴う。

実習が始まってすぐに教科担当の先生から「生徒は先生を見ている。話や行動など全てを受信して先生のイメージを作る。限られた時間だけ先生として振る舞うことはできない。」とおっしゃられた。生徒は教育実習生にとっても興味を持っている。歳が近いがゆえに、生徒からしても実習生の影響は大きい。だから、教員の立場での一つ一つの言動、行動の持つ責任が大きくなる。

また、ある先生から「教育実習生がやれることは、本当に教員がしている仕事の4割程度」と言われた。初めは理解ができなかった。生徒として見ていた先生方は授業をし、担任を持ってHRをしていたくらいであったからだ。だから教育実習において、授業をすれば… HRをすれば…と考えていた。しかしながら実際には、生徒指導、進路指導など多くのことをこなさなければならない。授業やHRだけといった場合、4割にも届かないことしか出来ない。

毎朝ある職員会議においては多くの連絡がなされる。聞き逃してしまえば生徒への連絡を怠るという

ことになる。先生方は日常のことであるため、実習生の理解のためにゆっくり説明などしてくれない。あくまで教員、大人として学校においては対応していかなければならない。具体的には、情報の取捨選択をする。メモを取る。それをわかりやすく伝える。

これらのことの持つ教員の責任はとても大きく、重いものとなる。

「問われる教育実習」を行う理由

教育実習は、教員を目指すために必要なことは何なのかを把握することが重要となってくる。実習の初めに教科指導教諭から「経験ある先生方の授業を一つでも多く見て、その要素を組み合わせ何らかの自分のスタイル、少なくとも授業の方向性を見出すことが重要である。実習の期間中に様々なことを試し、多くの先生方に指導してもらわないと意味がない。実習期間で自分を追い込んだからこそ分かってくることもある。」とのことであった。

実際に社会科の授業だけでなく、他教科の授業も観察した。生徒が興味を持つ授業の展開、理解しやすい説明のための予習、見返して復習できる板書、数多くの要素がバランスよく50分に収められている。その先生方の授業や、自分の行った授業を省みて反芻しなければ経験ある先生方の意見も指導もその場限りのものになってしまう。その意見や指導を糧にしていくかは自分の心がけ次第である。

先生方の指導は厳しい意見が多い。しかし、先生方の指導は『指導 = 期待』であり、実習生の授業をより良くしていくためにはどうすればいいのか、研究授業に向けての改善はどこなのかを的確に指導してくださっているがゆえに厳しい。

教員として生徒に伝わりやすい、理解しやすい授業を行うにはどうしたらいいのか、どんな改善を加えればいいのか、足りない要素は何なのか、という教員としての自己評価、自己改善を現役の教員と同じ立場にいる実習生に求められている。それが教員としての自覚である。

教育実習の集大成

教育実習においては、研究授業があり実習の集大

成となる。実際に授業を重ねれば重ねるほど、プレッシャーは大きくなっていった。そんな時にある先生から「一生懸命勉強して、努力して、教材の研究をして、上手くしよう成功しようなんて考えず、失敗や上手くいかないことも分かったうえで、どれだけ自分が一生懸命になれるか。その一生懸命さは生徒にも、先生方にも伝わる。実習生の授業なのだから上手くいかないのは当たり前。その上手くいかなかった場所を今後改善するために研究授業があるのだから。」とアドバイスをいただいた。先生方が研究授業において評価基準としているものは、その一回きりの授業を生徒と「本気」で向き合っているかどうかなのである。

授業を行う際にも「10教えるための100の教材研究」と言われ、流れや発問、事象の繋がりなど綿密な構成を作り上げた。しかしながら指導を受ける点は多かった。その際「学習指導案作成において大事なことは、何度でも授業の分析と再構成をして学習指導案を書き直すことを厭わない姿勢であり学習指導案作りの上手さではない」と言われた。授業において完璧は無く、反省と再構築の数を重ねることで授業の展開や説明、生徒を引き付けるテクニックなどが上達していくものだ痛感した。

研究授業の日になると、緊張した。そこで指導教諭の先生が「どれだけ準備しても安心することはない。それは、自分に足りないところがある現状を認識しているということも成長。今の自分と理想の隔たりが分かっているにもかかわらず前に踏み出すことが問われている。」とおっしゃられた。私はそこで少し気持ちが落ち着いた。研究授業ということもあり、とても焦っていたからである。その言葉で私は、研究授業に向けた教材研究や学習プリント作成など、ここまで努力したという事を証明できる良い機会と考え本気で研究授業に臨んだ。

おわりに

教育実習において先生方は、一学生であり、一実習生ではあるが、現場の一教員としての対応を求めてくる。それは教員における「責任感」と「自覚」をきちんと持って実習を行ってほしいからである。

その二つの意味が「矜持」という言葉に集約されていると思う。現場のプロから評価してもらえるという機会を無駄にしないためにも学生ではなく、教員としての「矜持」を持って教育実習に臨んでほしい。

「あなたはどんな教員になりたいの？」

木田 佳穂
(国際言語・文化学科4年)

はじめに

私は5月22日から6月9日までの3週間、母校の中学校で教育実習を行った。私の母校は離島にあり、1年生7名、2年生3名、3年生4名の全校生徒14名の学校である。



中学生の頃、熱心に指導してくれた国語教諭に憧れ、その漠然とした思いだけで教員を目指し、大学まで進学してきた私は、大学で専門的な勉強をするうちに「はたして私は教員に向いているのか」と考えるようになり、実習直前は不安で心に余裕がなかった。

実習初日

緊張で一睡もできずに迎えた初日、朝の会の時間をいただいて、初めて全校生徒の前に立った。そこで私は「中学の頃の国語の先生に憧れて教員を目指した」と話した。

初日は、校長先生の講話を受けることになっていた。講話が始まってすぐ、「あなたはなぜ、教員になりたいの？」と尋ねられた。私は「中学の頃の国語の先生に憧れたから」と答えた。すると今度は「あなたはどんな教員になりたいの？」と尋ねられた。私は、答えることができなかった。ずっと黙っていると校長先生は「君は自分がどんな教員になりたい

かが、まだはっきりしていないのではないか。教員を目指したきっかけは、当時の国語の先生だったかもしれないけれど、君自身が目指す教師像はしっかり持っていないと、3週間ただ乗り切るだけになってしまう。この実習中に、どんな教員になりたいのかを考えなさい。」と指導してくださった。私は答えられなかったことが悔しくて、涙を零してしまったが、その時に、実習中に答えを必ず見つけようと決意した。

集団に溶け込む難しさ

最初の頃、小規模校ならではの問題に直面した。完成した集団の中になかなか溶け込むことができなかったのである。離島のため、生徒同士はほとんどが小さい頃からの仲間、先生方と生徒も強い信頼関係で結ばれており、その中に入ることは、容易ではなかった。

初めのうちは生徒との接し方が分からず、ほとんどの時間を職員室で過ごしていた。しかし、指導教諭に「生徒は待っていても話しかけてきてはくれない。あなたが話しかけられるのを待っているように、生徒たちもあなたが話しかけてくれるのを待っている。」と指導され、まずは担当学級である3年生の生徒たちが興味のあることについて指導教諭に教えてもらい、HRの後の時間にその話題で話しかけてみた。すると、それまで私に対してそっけなかった生徒たちと会話が弾むようになった。それからは、とにかく私から生徒と関わろうと給食時間に話しかけたり、昼休みに体育館へ行き一緒に遊んだりした。

特に、土曜授業の一環として行われたシーカヤック体験では、生徒たちと海で泳いだり、カヤックに乗ったりと自然の中で交流を深めることができた。

生徒の表情＝授業への評価

授業は全学年の国語の授業を行うことになっていたため、指導案や授業準備もほぼ毎日3学年分用意しなければならず、寝ずに実習に向かった日もあった。

一生懸命準備をしても、上手くできず「やはり私

は教員には向いていないのかもしれない」と思ったこともあった。しかし、日に日に話しかけてくれる生徒が増え、私が緊張で授業中失敗しても、生徒たちは「そんなに緊張しないで！頑張って！」と、いつも励ましてくれた。そうした生徒たちの励ましが心の支えになり、実習中辛いことがあっても「生徒たちのために頑張りたい」と思えるようになった。

授業をしていると、生徒の表情がよく見える。わからないときの顔、わかったときの顔、その表情が私の授業への評価だと思った。それからは、生徒が満足した顔で終わる授業づくりを心掛けるようになり、生徒たちの満足顔を見るのが、私のやりがいになった。

何より嬉しかったのは、生徒から「先生の授業好き」「国語が楽しくなった」と言われたことである。授業が終わった後も、生徒同士で授業の内容について話したり、私に質問に来たりしてくれるようになった。指導教諭からは「授業が終わっても、生徒が授業の話をしてくれるのは、教師にとって何よりも嬉しいことです。それだけ先生の授業に、生徒たちが関心を持ってくれているのですよ。」と評価をいただいた。やはり、授業準備、教材研究には、しっかり時間をかけることが必要だと改めて感じた。

私が目指す教師像

3週間、様々な場面で生徒と接しながら「どんな教員になりたいのか？」という初日の校長先生からの問いの答えについて考えた。そして生徒たちとの学校生活を通して「生徒が常に満足する授業ができる教員」という、私が目指す具体的な教師像が見えてきた。

研究授業の後、評価をいただきに校長室を訪ねると、再び「あなたは、どんな教員になりたい？」と尋ねられた。初日は答えることができず、涙をこぼした問いであったが、今度は自信をもって「生徒たちのために、授業準備を怠らず、常に生徒が満足してくれる授業ができる教師になりたい」と答えることができた。校長先生は「その思いがあれば、君は良い教員になれるよ」と言ってくださった。初日とは違う、嬉しい涙があふれた。

終わりに

教育実習に行く前は、不安もあるだろう。授業の事、生徒とのコミュニケーションの取り方など、実際に実習が始まってから気づくこと、学ぶこともたくさんある。

教育実習を終えた今、これから教育実習に行く皆さんに言えることは、実習が始まるまでに「自分自身がどのような教員になりたいのか」ということを明確にし、実習中は、その目指す教師像に近づける努力をすることで、充実した実習になるということである。教育実習までの残りの時間を、ただ過ごすのではなく「なぜ教員になろうと思ったのか」「どんな教員になりたいか」など具体的に考え、充実した教育実習にしてほしい。